早稲田大学創造理工学部社会環境工学科における景観・デザイン教育
―土木の教養教育としての意義を考える―

早稲田大学　　正会員　○佐々木　葉

１．　社会環境工学科の概要[1)]

2003 年度に早稲田大学理工学部社会環境工学科が設置された．2007 年の学部再編によって創造理工学部へと移行したがそれによる学科の変化はほとんどない．前身の土木工学科は 1943 年に創設され，これは日本の土木工学科において 6 番目，私学では 2 番目である．土木工学科 60 年の歴史を踏まえ，学科名称，カリキュラムを修正して社会環境工学科となった．筆者の所属する景観・デザイン研究室はそのおりに新設された．学科を構成する教員数すなわち研究室数は 12，学生定員は現在 90 名である．景観・デザイン研究室は，交通計画，都市計画とともに計画・マネジメント部門に位置けられている．学科のカリキュラムを図１に示す．

２．景観およびデザインに関する授業

景観およびデザインに関する授業はすべて筆者が担当する．以下それぞれの概要を記す．

「空間デザイン」1 年後期(必修)：インフラストラクチュアや公共空間は，あたりまえに存在するのではなく，個人，集団を問わず誰かの意図と思いと知恵によって存在していること，その意図や知恵を読み解くきっかけと面白さとともに，デザインという概念の広さを伝えることをねらった導入教育としての授業である．道路・街路・橋梁・水辺・公園・まちなみといった対象の具体の事例を視覚的に紹介し，毎回の小レポートで自らの見方を確認させる．他学部，他大学の履修者も 1 割程度おり，デザインに関する教養科目ともいえる．この授業によって，デザインという概念への認識を新たにする学生が毎年いるようである．

「景観工学」2 年後期（選択）：『景観用語事典』[2)]に記されているような，土木分野で構築されてきた景観学に関する基礎知識と，景観法などの制度について概説する．8 割以上の学生が履修するが，出席率は途中から 5 割程度となり，試験で単位をとれる学生は 6 割程度である．毎回数名他学部の学生が履修している．

「パブリックデザイン」3 年前期(選択)：半分以上を日本及び西欧の都市史・都市デザイン史にあて，残りをパブリックデザインの実践におけるトピックとして参加や歴史の継承などを扱う．履修者はかなりしぼられる．

「計画・マネジメント系ゼミナール」3 年後期（選択必修）：計画系 3 名の教員で担当するが，単なるオムニバスでなく，現代の都市地域に関する問題意識の醸成と調査やプレゼンテーションのリテラシー習得を目的として構成し，グループ作業も課す．この科目を履修する学生がほぼ計画系の研究室で卒論をとる．逆にいえば，構造系など他部門に進む学生は，この科目を通して都市や地域を考える機会を持たない．

「計画設計実習」4 年前期（選択）：上記ゼミナールと同様計画系の 3 名の教員で担当するが，研究室配属後に行われるため，実質的には研究室単位で行われる．景観・デザイン研究室では，視覚的プレゼンテーションに必要なソフトウェアや地図類の使い方を習得するとともに，具体の対象地域の現状分析と提案を演習形式で行う．コンペのパネルやポスター制作を想定した作業となる．

「空間デザイン演習」2 年前期（選択）：具体のデザイン演習といえる唯一の科目である．実務で活躍するデザイナーを非常勤講師として招き，時間と労力をかけて学生が作品を制作する．2 年前期という専門知識がほとんどない段階で手探りで進む．2011 年までは小野寺康氏（小野寺康都市設計事務所代表），2012 年からは平賀達也氏（ランドスケープ・プラス代表）にご指導いただいている．初期では図面，模型といった手を動かすなでリアルなデザインを考えるアプローチ，現在は社会や空間に対する違和感を起点に使い方やマネジメントを想定することから場を考えるアプローチをとっている．履修者は半数程度であるが，最後まで生き残る学生は限られる．なお構造系に「構造デザイン演習」という科目があるが，実際には計算が中心である．

キーワード　景観，デザイン，教育，早稲田大学，土木技術者

連絡先　　〒169-8555　東京都新宿区大久保 3-4-1　早稲田大学創造理工学部社会環境工学科　ＴＥＬ03-5286-8093

３．デザインは独学

以上のようなカリキュラムにおいて，景観およびデザインに関するプログラムはかなり限定されている．特にデザイン演習については，3 年時にもう一つ組むことが望まれるが実現できていない．しかしデザインを学びたい学生はコンペへの参加や，さらには早稲田大学芸術学校とのダブルスクールという道をとるものもいる．デザインを本当に学びたい学生に対しては，本人が独自の道を切り開いていくことを応援することに今後しばらくはなるであろう．そのために研究室のプロジェクトとしての具体のデザイン検討機会の充実を図るとともに，すでに重要な場となっている GS デザイン会議等の学外の活動に期待している．

図１　早稲田大学社会環境工学科カリキュラム（下線は筆者担当の科目）

４．土木技術者の教養としての景観とデザイン

大学の土木系の学部教育において，景観およびデザインのプログラムを充実させ，それを構造系や水系とあい並ぶ柱として打ち立てることは，極めて難しい．もちろんマイナーながらも景観やデザインの専門家を育てる意義はあり，また上述したように個々の学生の資質とやる気に答える形であっても，それは続けていく．むしろここでは，景観やデザインを専門とせず，構造系や水系などの一般的な土木技術者の道を歩む学生たちに対して，景観やデザインの教育がどのような意義と役割を果たせるかを考えたい．

土木技術者には総合的なものの見方や判断が必要とされるという [3]．景観とは，対象を異なる視点から眺めることによる発見と感動に文字通り向き合うものであり，またデザインとは異なる観点から求められる要請を統合して形に仕上げることである．そういった，いはば，まなざしのとり方と思考の流れを身近な対象を通じて体感することが，景観およびデザインという分野に触れることで経験できる．そうした位置づけを明示的にした授業やプログラムを考えることは，もっと意識されてよいのではないかと思われる．

次に，デザインという言葉に対するアレルギーや偏見が土木業界においては，まだかなりあると感じるが，それを軽減するために，程度の差はあってもデザインの経験をすべての学生に体感させておくことは意義があるといえよう．そのために工事現場見学を重視するそのベクトルを，デザインという総合知の現場へも向けておくことを考えたい．なお筆者は建築学科出身であり，卒業後デザインとは無縁の仕事についている同窓生もデザインへの一定の興味は持ちつづける，少なくともアレルギーや敬遠という感覚はもっていない．それは三つ子の魂ではないが，学生時代に当然のようにデザインに触れた経験によるものではないかと考える．デザイン演習は，その意味でもできるだけ多くの学生が履修し，デザイナーという人間と直接に触れる経験を得る機会と位置づけることがあってよい．

以上のように，景観やデザインの教育プログラムが果たす役割を今一度土木系教育の中で考え議論することの必要性を，早稲田大学での 10 年間の経験を通じて考えている．

参考文献

1)　早稲田大学創造理工学部社会環境工学科ホームページ：http://www.civil.sci.waseda.ac.jp/

2)　「景観用語事典」篠原修編・景観デザイン研究会著：彰国社, 1998

3)　例えば「指揮者を育てる教育；大学土木教育がめざすもの」落合英俊，土木学会第 61 回論説(2)：http://committees.jsce.or.jp/editorial/system/files/no61_otiai.pdf，2012.6